

3 ジョン・バーリーコーン

ぼくは地中深い小室で動き出した
目は見えず、味も匂いもなく、触れるものもなく、音もしない。

ある日ぼくは扉の横木を滑らせた。
ぼくは大気に青白い鼻を突き出した。

何が見えたかだって？ 5
^ひ陽の中でぼくの髪や手は緑色だった。

ぼくは陽気なおじいさんに挨拶した—
案山子さんだ、棒とぼる服の。

ぼくはひどく貧しかった、それでも 10
踊ることができるのだ、風の笛や雨の太鼓に合わせて。

空を翔けて疲れたヒバリが
^{たま}偶にぼくの訪問客になった。

ある朝、ぼくは気分よく目覚めた—
ぼくは王子の黄色いマントを着ていた!

ぼくの踊る日に終りはないと思った 15
絶対に。

泥まみれの悪党が曲った鎌を手に
ぼくの前に立った、そして殺すぞと脅した。

男は根っこからぼくを切り離した。
そして手足を縛った。 20

男は骨から身を打ち落とした。
そして二重の輪の中にぼくを閉じ込めた、耳を聳する石に。

おお、なんたる痛みなんだ、
心臓が粉状になり液が滲み出ている!

「ジョン、沈んだり、浮いたりできるかい？」 25

男はぼくの塵を沸騰する大桶にばらまいた。

拷問者は

火が赤々と燃えるのを見て仕事を終えた。

畝で生まれて、

ぼくは人々の冬を大麦の祝い酒で永遠に紅く染めるのです。

30

(川畑 彰訳)